

「皆働社会」の実現と日本語検定へ応援メッセージ ～日本理化学工業、大山泰弘会長に聞く 後篇～

日本理化学工業株式会社

ライター 上村雅代

日本理化学工業株式会社は、昭和12年創業のチョークメーカーの老舗です。同年に開発された日本で最初の衛生無害な炭酸カルシウム製チョーク「ダストレスチョーク」をはじめ、ガラスや鏡などに書き、濡れた布で消せる「キットパス」など、広く愛されている製品を作っています。また、同社は1975年、川崎市に日本初の知的障がい者多数雇用モデル工場を開設し、その雇用割合は7割を超えています。障がい者雇用を積極的に推し進めてきた、会長の大山泰弘さんにお話を伺いました。



大山 泰弘 会長

日本の障がい者雇用をリードしてきたチョークメーカー、日本理化学工業の大山会長は、「皆働社会」を世に伝えることを使命に掲げています。

「皆働社会」とは、国が重度障がい者に規定の最低賃金を負担し中小企業に委託することで、障がい者が、働く幸せを感じながら自立できる社会です。

障がい者を20歳から60歳まで福祉施設でまるまる面倒をみると、国には一人あたり2億円、1年当たり500万円の負担が掛かります。一方、最低賃金を負担するのであれば1年に約150万円と、国の支出額は3分の1以下で済みます。本人は、グループホームなどの福祉のシステムの中で生活のケアを受けながら働き、月に12～13万円のお給料を手に入れます。寮費が6～7万円ですから残りは自分の好きに使い、金銭的にも自立できます。

ダストレスチョーク



ホタテの貝殻入りエコチョーク

キットパス



ホワイトボードやガラスに書いて消せるマーカーチョーク

労働者不足に悩まされる中小企業も助かります。給料の負担無しで働き手を確保できます。さらに障がい者の親御さんも安心できます。

「皆働社会」は、国・本人・企業・家族のまさしく「四方一両得」になる社会です。「皆働社会」が実現したら、間違いなく日本は世界から進んでいると言われるはず。なぜならば、日本の中小企業には手取り足取り教える「職人文化」があり、卒業後すぐに企業に就労できて幸せになる皆働社会は「福祉の直行便なんです」と会長。

国が求めなければならないものは「皆働社会」だと思います。日本国憲法でも「健康で文化的な生活を営む権利」や「国民の幸福の追求の尊重」が謳われており、さらに障がい者も国民の一人として幸せを感じながら働く皆働社会は日本国憲法第27条に書かれています。

張り合いのある企業のなかで、人のために働き、役に立ち、必要とされるまで頑張れば、必ず愛される人間になります。じっと閉じこもっていたのでは幸せになれません。人は誰しも努力しなければ愛されないのです。

皆が働き、幸せを得られる社会を提言されている大山会長が、日本語検定に応援メッセージをくださいました。

「近年になって、ようやく日本語を自分たちの言葉として大事に使おうという気風が出てきました。普段使っている言葉が、どうしてこういう文字なのかを考え、意味を知って使うことが大切だと思います。そうすると日本語により親しみを感じられるのではないのでしょうか。日本語検定をきっかけに、正しい日本語を日常に活用できるようになって欲しい。文字の意味を知ることで、自分の生き方の参考になることもあると思います」

日本語検定でも、大山会長が提唱なさっている「皆働社会」の実現を応援し、「皆働社会」という社会のあり方を多くの方に広めたいと思っています。



大山会長、どうもありがとうございました。

著書

「利他のすすめ」WAVE 出版
「働く幸せ」WAVE 出版



上村雅代(かみむら まさよ) プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊(共同通信社)共著。現在、息子の育児奮闘中。最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。